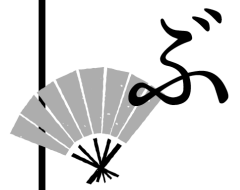


# 古典落語



# 字



落語家  
立川談四楼

## 第十四回 たが屋

### たが

を作って売り、あるいは修理をするのがたが屋さんの仕事です。たがは漢字だと「籬」という字です。「たがが緩む」とか「たがが外れる」とか言う、あのタガです。桶や樽などの外側にはめて締めるのに使う、竹を割き、編んで輪にしたものです。どうです、どんなものが目に浮かびましたか？

両国の川開き、花火見物の客で両国橋の上は大変な人出で身動きが取れない。花火が打ち上がる度に「玉屋あゝ」「鍵屋あゝ」の掛け声が絶えない。「橋の上、玉屋玉屋の声ばかり、なせに鍵屋と言わぬ情（錠）なし」と歌にあるように、「玉屋あ

ゝ」の声が圧倒的に多い。

### ごった

返す橋の一方から、たが屋が一杯機嫌で道具箱とたがを担いでやってきた。もう一方からは、供を連れた侍が馬に乗ってやってきた。たが屋は道具箱を邪魔にされ、侍一行はこの人混みに馬でと、無茶同士が橋の真ん中で出くわした。

「どけどけい」と言われてもたが屋、どこも人で動けない。侍が「どけと言うのに」と突き飛ばした。たが屋は尻餅をついて道具箱を放り出した。落ちた拍子にたがが弾け、竹の伸びていく勢いは凄まじく、スルスルッと伸びて、馬上の侍がかぶっ

ている笠を宙にハネ上げた。上が飛んだから残ったのは顎ひもと土瓶敷どびんじきのようなものだけ。

間抜けな姿に群衆がドツと笑う。町人に笑われるのを何よりも恥とする侍、「無礼者！」と一喝。「勘弁してください。突かれたから留めが外れてたがが飛んだんで」「ええい、申し開き一切相ならん。それへ直れ。無礼討ちにしてくれる」。たが屋は何度も謝るが、侍は斬るの一点張り。ついにたが屋はキレる。「さあどっからでも斬ってもらおうじゃねえか。斬って赤い血が出なかったら取りかえてやるスイカ野郎とはオレのこった」

馬上の侍が顎をしゃくると本当に供侍が斬りかかってきた。もう肝きもが座ったたが屋、体をかわすと侍の手首を打った。侍が刀を取り落とす。拾うが早いかたが屋、「コンチクショ〜」と刀で力任せに殴った。普段から桶のケツをひっぱたいている馬鹿力だから斬れた。

## 二人目

の侍が斬りかかる。スキだらけのたが屋、あまりの恐怖かがに屈み込んだ。ひょいと上を見ると、たが屋がいなくなったので刀が橋の欄干に食い込み、侍はこれを抜こうと焦っている。すかさずたが屋、刀を突き上げた。

「たが屋は強いねえ」と、突然湧わき上がるたが屋コール、「た

が屋、たが屋、たが屋」

供を二人斬られては黙っていられない。侍は馬からヒラリ飛び下りると、槍やりも持ちから槍を受け取りたが屋に迫る。エイッと刺してきたのを体をかわして槍の先端を斬った。槍の先っぽがなくなった。ただの棒である。もうウドンをこねるよりしようがない。ヤリくりがつかない。仕方なく放り出した。これが「やりっ放しばな」の語源で……。

侍があらためて大刀だとうを抜いた。ピタッと構えるとスキがない。やはり普段から鍛えている侍は違う。エイヤッと横に払った一文字。たが屋の首が中天高く夜空に舞う。群衆は無責任なもの、声をそろえて「上がった上がった上がった、たが屋あ〜」。

## 花火

にたが屋の首を見立てたオチです。落語として素晴らしいオチだと思いますが、たが屋が侍を斬り、侍の首が飛んで「たが屋あ〜」とのオチでやる人もいます。しかし偶然二人倒したとはいえ、あまりにリアリティーがありません。侍の首が飛べば群衆は熱狂するでしょうが、武士と町人、それも職人とはあまりにも実力がかけ離れているのです。との解釈で私はたが屋の首を飛ばしています。

そういえば久しく花火見物をしていませんね。さて今年はどうでしょうか。